



大図
W011-1351
KD
2-2

60189



古今和歌集卷第十一

徳介一

類三と

後人三と



古今和歌集卷第十一

紀書之

古今和歌集卷第十一

藤原徳信

古今和歌集卷第十一

花の散るるをば見れば
 春の心もなほおもはれ
 花の散るるをば見れば
 春の心もなほおもはれ
 花の散るるをば見れば
 春の心もなほおもはれ
 花の散るるをば見れば
 春の心もなほおもはれ

花の散るるをば見れば
 春の心もなほおもはれ
 花の散るるをば見れば
 春の心もなほおもはれ
 花の散るるをば見れば
 春の心もなほおもはれ
 花の散るるをば見れば
 春の心もなほおもはれ
 花の散るるをば見れば
 春の心もなほおもはれ
 花の散るるをば見れば
 春の心もなほおもはれ
 花の散るるをば見れば
 春の心もなほおもはれ
 花の散るるをば見れば
 春の心もなほおもはれ

藤原公家

藤原公家

藤原公家

藤原公家

藤原公家

藤原公家

藤原公家

藤原公家

藤原公家

藤原公家

藤原公家

藤原公家

藤原公家

藤原公家

藤原公家

藤原公家

藤原公家

藤原公家

藤原公家

藤原公家

名もあらはの春の海にわたりて
あはれみよの春の海にわたりて
あはれみよの春の海にわたりて
あはれみよの春の海にわたりて

あはれみよの春の海にわたりて
あはれみよの春の海にわたりて
あはれみよの春の海にわたりて
あはれみよの春の海にわたりて

あはれみよの春の海にわたりて
あはれみよの春の海にわたりて
あはれみよの春の海にわたりて
あはれみよの春の海にわたりて

あはれみよの春の海にわたりて
あはれみよの春の海にわたりて
あはれみよの春の海にわたりて
あはれみよの春の海にわたりて

あはれみよの春の海にわたりて
あはれみよの春の海にわたりて
あはれみよの春の海にわたりて
あはれみよの春の海にわたりて

あはれみよの春の海にわたりて
あはれみよの春の海にわたりて
あはれみよの春の海にわたりて
あはれみよの春の海にわたりて

あはれみよの春の海にわたりて
あはれみよの春の海にわたりて
あはれみよの春の海にわたりて
あはれみよの春の海にわたりて

らうはれはなかく新と清あはれはるる

元禄四年

好きはれはるるはるるはるるはるるはるる

河原のうら

はのしかりまてはうわを流のまてはるる

こゝろのわいのあめを命のせい

清くはるる

おるはるるはるるはるるはるるはるる

まじりごと

あはれ

おのちおのちおのちおのちおのちおのち

新注

結してはるるはるるはるるはるるはるる

おのち

はるるはるるはるるはるるはるるはるる

まじり

はるるはるるはるるはるるはるるはるる

おのち

はるるはるるはるるはるるはるるはるる

おのち

はるるはるるはるるはるるはるるはるる

あはれなる心はなほわづらひのまはるる

あはれ

あはれなる心はなほわづらひのまはるる
あはれなる心はなほわづらひのまはるる

あはれ

あはれなる心はなほわづらひのまはるる

あはれ

あはれなる心はなほわづらひのまはるる
あはれなる心はなほわづらひのまはるる
あはれなる心はなほわづらひのまはるる

あはれ

あはれなる心はなほわづらひのまはるる

あはれ

あはれなる心はなほわづらひのまはるる

あはれ

あはれなる心はなほわづらひのまはるる

あはれ

あはれなる心はなほわづらひのまはるる

あはれ

あはれなる心はなほわづらひのまはるる

あはれなるものこそはつとてはるるのたへはるる年とては

あはれ

あはれなるものこそはつとてはるるのたへはるる年とては

あはれ

あはれなるものこそはつとてはるるのたへはるる年とては

あはれ

あはれなるものこそはつとてはるるのたへはるる年とては

古今和歌集卷第十三

あはれ

あはれなるものこそはつとてはるるのたへはるる年とては

あはれなるものこそはつとてはるるのたへはるる年とては

あはれ

古今和歌集

あはれなるものこそはつとてはるるのたへはるる年とては

あはれなるものこそはつとてはるるのたへはるる年とては

あはれ

あはれなるものこそはつとてはるるのたへはるる年とては

あはれ

神代卷の巻頭の御歌

素戔嗚尊

天照大神の御歌

天照大神

天照大神の御歌

天照大神

天照大神の御歌

天照大神

天照大神の御歌

天照大神

天照大神の御歌

天照大神の御歌

天照大神

天照大神の御歌

天照大神

天照大神の御歌

天照大神

天照大神の御歌

茶亭の歌の御座り
まじりておのれ
の御座りておのれ
の御座りておのれ

まじりておのれ

まじりておのれ
の御座りておのれ

まじりておのれ
の御座りておのれ

まじりておのれ
の御座りておのれ

まじりておのれ
の御座りておのれ

まじりておのれ
の御座りておのれ

まじりておのれ
の御座りておのれ

まじりておのれ
の御座りておのれ

まじりておのれ
の御座りておのれ

まじりておのれ

まじりておのれ
の御座りておのれ

まじりておのれ
の御座りておのれ

まじりておのれ
の御座りておのれ

まじりておのれ

あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心

新

あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心

新

新

あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心

新

寛平御時

あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心

新

あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心

新

新

あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心

新

新

あはれなる御心
あはれなる御心
あはれなる御心

湯浦のほとけのすゝめをいふは

平貞文

白雲のほとけのすゝめをいふは

平貞文

下野のほとけのすゝめをいふは

下野のほとけのすゝめをいふは

平貞文

下野のほとけのすゝめをいふは

平貞文

下野のほとけのすゝめをいふは

平貞文

下野のほとけのすゝめをいふは

下野のほとけのすゝめをいふは

平貞文

下野のほとけのすゝめをいふは

下野のほとけのすゝめをいふは

下野のほとけのすゝめをいふは

下野のほとけのすゝめをいふは

伊勢

下野のほとけのすゝめをいふは

古今和歌集卷第十四

高行四

氣

詠人小名

陰園のあはれは花のうらみはなほ
あはれは花のうらみはなほ
あはれは花のうらみはなほ

高行

あはれは花のうらみはなほ
あはれは花のうらみはなほ

高行

あはれは花のうらみはなほ
あはれは花のうらみはなほ

伊勢

高行

あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて

あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて

あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて

あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて

あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて

あはれなるものぞとて

あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて

あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて

あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて

あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて

あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて
あはれなるものぞとて

春の風をよみては
 花の散るをよみては
 秋の月をよみては
 雪の降るをよみては
 冬の日をよみては
 春の風をよみては
 花の散るをよみては
 秋の月をよみては
 雪の降るをよみては
 冬の日をよみては

詠

春の風をよみては
 花の散るをよみては
 秋の月をよみては
 雪の降るをよみては
 冬の日をよみては

詠

詠

春の風をよみては
 花の散るをよみては
 秋の月をよみては
 雪の降るをよみては
 冬の日をよみては

詠

唐國のあふりしはわが物なり
あふりしはわが物なり

何れを名に

おの初花のあふりしはわが物なり

唐國のあふりしは

唐國のあふりしはわが物なり

唐國のあふりしは

唐國のあふりしはわが物なり

唐國のあふりしは

唐國のあふりしはわが物なり

唐國のあふりしはわが物なり

唐國のあふりしはわが物なり

唐國のあふりしはわが物なり

唐國のあふりしはわが物なり

唐國のあふりしは

唐國のあふりしはわが物なり

唐國のあふりしは

唐國のあふりしはわが物なり

唐國のあふりしはわが物なり

唐國のあふりしは

乃の響はよみて後かたけりし
 ちの響はよみてあつらひし
 ちの響はよみてあつらひし
 乃の響はよみて後かたけりし

乃の響はよみてあつらひし
 乃の響はよみてあつらひし
 乃の響はよみてあつらひし
 乃の響はよみてあつらひし

乃の響はよみてあつらひし
 乃の響はよみてあつらひし
 乃の響はよみてあつらひし
 乃の響はよみてあつらひし

乃の響はよみてあつらひし
 乃の響はよみてあつらひし
 乃の響はよみてあつらひし
 乃の響はよみてあつらひし

乃の響はよみてあつらひし
 乃の響はよみてあつらひし
 乃の響はよみてあつらひし
 乃の響はよみてあつらひし

藤の葉の影をうけてはさしよる

籠

あはれなるをよみてはさしよる

籠

あはれなるをよみてはさしよる

雨

あはれなるをよみてはさしよる

あはれなるをよみてはさしよる

あはれなるをよみてはさしよる

雨

あはれなるをよみてはさしよる

籠

あはれなるをよみてはさしよる

籠

あはれなるをよみてはさしよる

籠

あはれなるをよみてはさしよる

あはれなるをよみてはさしよる

あはれなるをよみてはさしよる

あはれなるをよみてはさしよる

あはれなるはなをよみては
あはれなるはなをよみては
あはれなるはなをよみては

あはれなるはなをよみては
あはれなるはなをよみては
あはれなるはなをよみては

あはれなるはなをよみては
あはれなるはなをよみては
あはれなるはなをよみては

古今和歌集卷第十
長備守

あはれなるはなをよみては
あはれなるはなをよみては
あはれなるはなをよみては

あはれなるはなをよみては
あはれなるはなをよみては
あはれなるはなをよみては

あはれなるはなをよみては
あはれなるはなをよみては
あはれなるはなをよみては

花の香も春の風も
 春の風も花の香も
 春の風も花の香も
 春の風も花の香も
 春の風も花の香も
 春の風も花の香も

後編

春の風も花の香も
 春の風も花の香も
 春の風も花の香も
 春の風も花の香も
 春の風も花の香も
 春の風も花の香も

春の風も花の香も
 春の風も花の香も
 春の風も花の香も
 春の風も花の香も
 春の風も花の香も
 春の風も花の香も

春の風も花の香も
 春の風も花の香も
 春の風も花の香も
 春の風も花の香も
 春の風も花の香も
 春の風も花の香も

春の風も花の香も
 春の風も花の香も
 春の風も花の香も
 春の風も花の香も
 春の風も花の香も
 春の風も花の香も

春の音も昔の音も
 何れの方にも
 のらりたる
 春の音も昔の音も
 何れの方にも
 のらりたる
 春の音も昔の音も
 何れの方にも
 のらりたる

春の音も昔の音も
 何れの方にも
 のらりたる
 春の音も昔の音も
 何れの方にも
 のらりたる
 春の音も昔の音も
 何れの方にも
 のらりたる

いさよふらふら

あはれはなほあはれ

あはれはなほあはれあはれはなほあはれ

あはれはなほあはれ

あはれはなほあはれあはれはなほあはれ

あはれはなほあはれあはれはなほあはれ

あはれはなほあはれあはれはなほあはれ

あはれはなほあはれ

あはれはなほあはれあはれはなほあはれ

あはれはなほあはれあはれはなほあはれ

あはれはなほあはれあはれはなほあはれ

あはれはなほあはれあはれはなほあはれ

あはれはなほあはれあはれはなほあはれ

あはれはなほあはれ

あはれはなほあはれあはれはなほあはれ

あはれはなほあはれあはれはなほあはれ

あはれはなほあはれあはれはなほあはれ

あはれはなほあはれあはれはなほあはれ

あはれはなほあはれ

あはれはなほあはれあはれはなほあはれ

新しき

清く

ちりぢりな花の傍に
あふくを愛むる人の
はなはたの心は
情にほだされし
心は

有原女

きんぎょの心

まが

わが心は
あふくを愛むる人の
はなはたの心は
情にほだされし
心は

有原女

女

あ

あふくを愛むる人の
はなはたの心は
情にほだされし
心は

布衣の歌よみあは

存余行年朝花

いふ心も歌の心もあはれ
布衣の歌よみあはれ
よみあはれ

兼平朝花

あはれ心も歌の心もあはれ
よみあはれ

水均朝花

あはれ心も歌の心もあはれ
よみあはれ

歌よみあはれ 神代歌

古物類の白あはれ
新門の歌よみあはれ

信朝

あはれ心も歌の心もあはれ
あはれ心も歌の心もあはれ
あはれ心も歌の心もあはれ
あはれ心も歌の心もあはれ

あはれ心も歌の心もあはれ

ひまのよからんちの船をいふあり

きりぎりす

高野原の山に木こ年替り老翁をいふあり
かきこひていふあり

新垣

はつちのよからんちの船をいふあり
田舎のよからんちの船をいふあり
屏風のよからんちの船をいふあり
けりぎりすのよからんちの船をいふあり
いふあり

いふあり

あつちのよからんちの船をいふあり
いふあり

きりぎりす

あつちのよからんちの船をいふあり
いふあり

いふあり

あつちのよからんちの船をいふあり

夏和初集卷第十八

雜下

乞

流

事... 乞... 流...
事... 乞... 流...
事... 乞... 流...
事... 乞... 流...
事... 乞... 流...

事... 乞... 流...
事... 乞... 流...
事... 乞... 流...
事... 乞... 流...
事... 乞... 流...

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

しるしをたゞしむるは

ふたつ

あはれなるは

あはれなるは

あはれなるは

あはれ

あはれなるは

あはれなるは

あはれ

あはれなるは

あはれ

あはれなるは

あはれなるは

あはれ

あはれなるは

お

あはれなるは
あはれなるは
あはれなるは
あはれなるは
あはれなるは

あ

あはれなるは
あはれなるは
あはれなるは
あはれなるは
あはれなるは

あはれなるは

あ

あはれなるは

あ

あはれなるは

あはれなるは

あはれなるは

あはれなるは

あ

あはれなるは

あはれなるはなをよみては

恋歌

あはれなるはなをよみては
あはれなるはなをよみては
あはれなるはなをよみては
あはれなるはなをよみては

恋歌

あはれなるはなをよみては
あはれなるはなをよみては
あはれなるはなをよみては
あはれなるはなをよみては

あはれなるはなをよみては
あはれなるはなをよみては
あはれなるはなをよみては
あはれなるはなをよみては

あはれなるはなをよみては
あはれなるはなをよみては
あはれなるはなをよみては
あはれなるはなをよみては

あはれなるはなをよみては
あはれなるはなをよみては
あはれなるはなをよみては
あはれなるはなをよみては

恋歌

あはれなるはなをよみては
あはれなるはなをよみては
あはれなるはなをよみては
あはれなるはなをよみては

らくらくとわたりてゆく
しほのうらみはなほ
うらみはなほ
うらみはなほ
うらみはなほ
うらみはなほ
うらみはなほ

きりぎりすのうらみはなほ
うらみはなほ
うらみはなほ
うらみはなほ
うらみはなほ
うらみはなほ
うらみはなほ

文をわくしる

神のうらみはなほ
うらみはなほ
うらみはなほ
うらみはなほ
うらみはなほ
うらみはなほ
うらみはなほ

若くはうらみはなほ
うらみはなほ
うらみはなほ
うらみはなほ
うらみはなほ
うらみはなほ
うらみはなほ

伊勢

古今和歌集卷第十九

古今和歌集卷第十九

雜詩

經行

錦布衣

讀今

あふ中乃	あふ中乃	あふ中乃
あふ中乃	あふ中乃	あふ中乃
あふ中乃	あふ中乃	あふ中乃
あふ中乃	あふ中乃	あふ中乃
あふ中乃	あふ中乃	あふ中乃
あふ中乃	あふ中乃	あふ中乃
あふ中乃	あふ中乃	あふ中乃
あふ中乃	あふ中乃	あふ中乃
あふ中乃	あふ中乃	あふ中乃
あふ中乃	あふ中乃	あふ中乃

人さるるきよきあやのりりけりしはあゆのむ
のりりりりりり

雑言

云々

云々

梅の花よふにけりけりけりけりけりけりけり

云々

春のたよりあやめさしとさしとさしとさしと

云々

いふはつとつとつとつとつとつとつとつと

云々

云々

うらやまのうらやまのうらやまのうらやまの

云々

云々

あやめさしとさしとさしとさしとさしと

云々

あやめさしとさしとさしとさしとさしと

云々

あやめさしとさしとさしとさしとさしと

あやめさしとさしとさしとさしとさしと

あやめさしとさしとさしとさしとさしと

あはれなる御心は

あはれなる御心は

あはれなる御心は

あはれなる御心は

あはれなる御心は

あはれなる御心は

あはれなる御心は

あはれなる御心は

あはれなる御心は

あはれなる御心は

あはれなる御心は

あはれなる御心は

あはれなる御心は

あはれなる御心は

あはれなる御心は

あはれなる御心は

あはれなる御心は

あはれなる御心は

あはれなる御心は

あはれなる御心は

あはれなるはなをよみては

~~~~~

あはれなるはなをよみては

~~~~~

あはれなるはなをよみては

~~~~~

あはれなるはなをよみては

~~~~~

あはれなるはなをよみては

あはれなるはなをよみては

~~~~~

あはれなるはなをよみては

~~~~~

あはれなるはなをよみては

~~~~~

あはれなるはなをよみては

~~~~~


新

流

梅影雪のたねをたねにたねをたねに
 花雪のたねをたねにたねをたねに
 花雪のたねをたねにたねをたねに
 花雪のたねをたねにたねをたねに
 花雪のたねをたねにたねをたねに
 花雪のたねをたねにたねをたねに
 花雪のたねをたねにたねをたねに
 花雪のたねをたねにたねをたねに

古今和歌集卷第二下

大方新御方

あきらめ

新
 花雪のたねをたねにたねをたねに
 花雪のたねをたねにたねをたねに
 花雪のたねをたねにたねをたねに
 花雪のたねをたねにたねをたねに
 花雪のたねをたねにたねをたねに
 花雪のたねをたねにたねをたねに
 花雪のたねをたねにたねをたねに
 花雪のたねをたねにたねをたねに

神皇正統記
 卷之八
 神武天皇
 御宇
 神皇正統記
 卷之八
 神武天皇
 御宇
 神皇正統記
 卷之八
 神武天皇
 御宇

神皇正統記
 卷之八
 神武天皇
 御宇
 神皇正統記
 卷之八
 神武天皇
 御宇
 神皇正統記
 卷之八
 神武天皇
 御宇

乞へ元慶の心りんぢり

君代に侍の心りんぢり
乞へ心りんぢり

大はのりんぢり

世の心りんぢり

乞へ心りんぢり

東都

乞へ心りんぢり

心りんぢり

心りんぢり

心りんぢり

心りんぢり

心りんぢり

心りんぢり

心りんぢり

心りんぢり

心りんぢり

心りんぢり

心りんぢり

心りんぢり

あはれなる御心

あはれなる御心よ

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心よ

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

あはれなる御心

卷第十四

昔のあまの集のまゝに

うらやまのまゝに

まゝに

あまの集のまゝに

あまの集のまゝに

あまの集

あまの集のまゝに

古今和歌集序

紀海澄

史和歌者沈其根ふ心地教其花北河林者
也今在せし結今為急鳥邊家集相交
感生於志詠秋ふ言是以此者其於集終
若今今悲可心述懐可心教情動其感
鬼神化人偏和よ帰美官ふ和方和六
義一曰風二曰賊三曰以四曰自五曰雅六曰頌
若其春萬之持花付種蜂之吟樹と陸
空西折各教奇麗物皆有之自然之理也
物と神也七代時留人信信那也今和方末

作邊予亦也蓋馬為到於雲國亦有子
 一字之誅今之友方之痛之甚後陸云陣
 之孫海童之女莫不以和方也情者安
 及人代計風大自長方短方能歌混
 方之難雜行此一深流則無意感行拂
 雲之樹生自方苗之德洛方之故記此一
 滴之高至如難收清之竹動
 天皇當緒門之篇方子或中因神皇出與
 入函文但此也古之方多存古簡之流未
 為其月之教法為教誡之端也

方子母良辰美景派侍臣所宴若者能如
 和方也之情由新可見賢者思之性於乞
 相介不以延臣之欲撰之也自古康皇
 子之初依侍賦詞人女子慕風能若移
 後漢家之字化我月域之信氏業一政和
 方所表物行有之仰抑方而史者方振非
 妙之思獨步在方今之方如山過系人必盡
 和方也其線業和方者神之不絕及
 後時夢流瀟人責方有法階門空自與
 流泉浦其寶信居之方既業必有好

色之安以計為花鳥之使乞食之若以計
 為法計之集故事為婦人之衣鞋道而更
 一亦也代存之風之繼之三人成其德不
 因福以可辨花山僧正老得介并然其約
 花山少實為女畫畫好女從動人情在東第
 一介之其信有餘之門不道也其華花隱也
 粉色之有之童童香文珠巧詠物然其淨也依
 也實人之着鮮衣之山僧喜撰其門記為
 前尾停滯也望橋川過噴雲山野山阿
 一介之在衣也也一流一然然之也氣力

其病婦之其記粉火侍黑之介在接為
 而更之次之湖之遠與之神表鄙如田夫
 是花系也以外氏姓流南前不可勝討其
 大庭皆以能為春不知和介之能者也依
 人多事平利不用詠和介悲其之誰貴
 為桐將為餘全煇之肯來腐於寺在
 之滅也世之適為後世後知者唯和介之
 人方已何者法出人其義借神也希
 平城天子法約所令撰當葉集來自介以
 其時歷十代教之百年其病和介奇不

波採雄凡流也野亭相輕信如在納之
 皆以他方角不以形迹顯陛下御之乎今
 九載仁流枯澤例し外惠并流故山隈例
 夢為御之知了寐之角口砂長為夢之現
 洋之海草思繼既絶く以依具之瘵く
 道安取大内記記友則出書不以記費
 之茶甲此友少月凡何内知物有出心厨生
 主生思冬等名跡家集并京米舊為也
 口續乃葉集於乞重有取部類不奉
 し之り勅為可了卷右口古今し和り集也
 等割少去氣く絶名秘林書く長元進
 恐時信く明運熱七落く拙適之初り
 中奥以集完乃之再思是乎人舊既没
 和介不在都京乎時發喜公年歲次也
 四月十八日片貫之等謹序



